

レヴァント回廊の歴史を探る

—第6次(2020年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査—

西山 伸一 中部大学人文学部准教授

ジャン・アブドゥル＝マッシーハ 国立レバノン大学文学人間科学部芸術考古学科教授

Investigating the History of the Levantine Corridor: The Sixth Season (2020), the Excavations of Phoenician Port of Batroun, Lebanon

NISHIYAMA, Shin'ichi Associate Professor, College of Humanities, Chubu University

ABDUL MASSIH, Jeanine Professor, Department of Arts and Archaeology, Faculty of Letters and Human Sciences, Lebanese University

西山
伸一
ほか

1. はじめに

レバノンの地中海沿岸に位置するバトルーン(Batroun)遺跡の発掘調査は、2018年、中部大学・レバノン大学合同調査団によって開始された。3年目を迎えた調査は、コロナ禍にもかかわらず2020年にも実施された。ただ、日本からの渡航が制限されたため、日本側は、オンラインを通じてレバノン側と情報交換・相談を繰り返しながら調査に参加した。実際の発掘調査は、レバノン大学関係者が中心となって実施した。

今シーズンは、バトルーン遺跡の重要地区をかつてない広範囲な規模で発掘することとなった。調査期間は、2020年9月28日から12月22日であった。調査地区は、H地区と命名され、これまで確認されたバトルーン遺跡の中央部西端に位置する(図1)。地区の大きさは南北約20m、東西約40mの約800m²を測る。

この地区は、A地区とC地区の間にあり、2017年にレバノン考古総局が住宅改築にともなう緊急発掘調査を実施した場所である。しかし、この2017年の調査成果はほとんど公開されておらず、どのような遺構や遺物が出土したのかその詳細は不明であった。考古総局に残されている簡便な公式レポートによると鉄器時代／ペルシア時代から後期青銅器時代の文化層が確認され、石組みの建築遺構が発見されたという。これが確実にだとするとバトルーン遺跡の起源は少なくとも後期青銅器時代にさかのぼる。

今回の調査は、H地区でいままで休止していた住宅工事が再開することとなり、より広範囲な面積を事前に緊急発掘する必要が出てきたことにより実施された。今回もレバノン考古総局からの要請により中部大

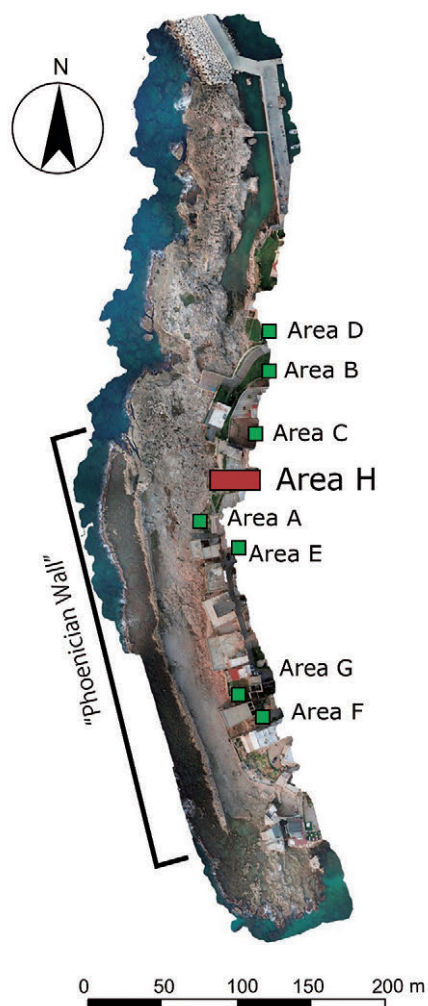


図1 バトルーン遺跡と調査区の分布。中央に位置するのがH地区。地中海側には「フェニキアの壁」がある。

学・レバノン大学合同調査団が発掘調査を担当することとなった。

さて、2017年に出土した建築遺構は、しばらく出土した状態で放置されていたが、残念ながら2019年頃に大半の遺構が破壊されてしまうという憂き目にあつ

た。そこで私たちの調査は、この2017年に出土した建築遺構についても、将来的な遺構復元を見据えて、建材の回収、記録、保管を行うこととなった。

2. H地区調査の概要

上述したようにこの地区(図2)は、バトルーンのテルと考えられる高まりの中央部西端に位置する。そのすぐ西には岩盤が広がり、その先にはいわゆる「フェニキアの壁」が位置する。この地区は、1)北東区(Sector A)、2)南東区(Sector B)、3)西区(Sectors C and D)の3つに分けられる(図3)。北東区は、2017年に考古総局主導の調査があった場所であり、鉄器時代／ペルシア時代から後期青銅器時代の文化層が発見された。ここは主に破壊された建材のクリーニング、および東セクションの精査、記録作業が実施された。南東区は、建築遺構群の南端部分が見つかった。これらの遺構は、鉄器時代からオスマン朝時代に年代づけられる。最後の西区は、遺跡の西端部分にあたり、ここでは鉄器時代とローマ時代に年代づけられる石切り場ピットが検出された。

2.1. 北東区

この地区は、2017年に出土した建築遺構が破壊された状態で残されていた場所である。散らばった建材や残された遺構・遺物を確認したところ、鉄器時代／ペルシア時代に年代づけられることが確認できた。建材の多くは切石で構成されており、D地区で検出されたものと類似していた。おそらくバトルーンの沿岸部に広がる岩盤から石材を入手したと考えられる。2017年に出土した建築遺構は破壊されたものの、出土時の写真と図面が残されており、可能な限り建材の同定を行った。これらの建材は近隣に確保した倉庫で保管されることとなった。

また北東区の東端には現在の地表面から続く文化層のセクションが残されており、それを精査した。この東セクションの南側では、オスマン朝時代の建造物が継続的に建造されているのが観察できた。ここにはアーチ構造をもつ部屋が1つあり、その基礎は、鉄器時代の文化層に到達していた。このアーチのすぐ下層には、土器焼き窯が検出された。出土土器からローマ・ビザンツ時代に年代づけられる。

一方、東セクションの北側では、2つの焼成遺構が発見された。1つは中世の土器焼き窯であり、もう1つは金属精錬用のかまどであった。この部分はなんらかの工房跡であった可能性がある。これらの焼成遺構



図2 西方、つまり地中海側から見たバトルーン遺跡H地区全景。



図3 H地区の区分。地中海側はこの写真の下方になる。

の下にはヘレニズム時代の建築遺構が確認された。2017年の調査でもヘレニズム時代の文化層が検出されており、そのことを裏付ける成果であった。

またこの地区を覆っていた破壊されて散乱していた鉄器時代／ペルシア時代の建材を取り除いたところ、鉄器時代に年代づけられる新たな建築遺構が検出された(図4)。このことは、この部分で継続的な建築活動が行われていることを示している。

2.2. 南東区

この地区は、2017年の調査では発掘されていない場



図4 北東区の空撮写真。石壁で構築された大型の建造物が見える。



図5 北から見た南東区。現代の住宅の下には鉄器時代／ペルシア時代の文化層が見える。



図6 南東区の平面図。濃い色の壁はペルシア時代、薄い色の壁は鉄器時代のもの。鉄器時代には東西方向に走る二重の壁が見える。



図7 南東区の南東隅で出土した建造物への入口。北から。

所であり、現在は、工事用の傾斜路となっている(図5)。ここでは、2017年に発見された建築遺構群の南端が検出された。この部分は、鉄器時代からペルシア時代の壁やピットが複雑に絡み合っており、何度も建て替えが行われたと考えられる(図6)。この上に、ローマ・ビザンツ時代、さらにオスマン朝時代の文化層が確認された。鉄器時代末期(7世紀)と考えられる時代からは、切石と人頭大の石を積み上げた壁で構成される建築遺構への入口(幅0.75 m)が発見された(図7)。入口部分の壁は約1.5 mの残存高をもち、幅は0.5 mであった。入口は南に向かって伸びている通路と接続していた。通路は、人頭大の石を積み上げた石壁が両側にあった。

もう1つ指摘すべきは、この地区の北側で幅0.8 mを測り東西に走る二重の大型の壁が検出されたことである(図6)。通常の壁は、幅0.5~0.6 mを測る。この壁の南側のものは、西方で幅1.7 mの入口部をもっていた。壁は、途中でオスマン朝時代の井戸により切断さ

れているが、長さ約16 mを測った。この壁は、北東区で出土した建築遺構群に対する防御壁であったのかもしれない。さらに南側の壁にある入口付近では石敷き床が検出された。残りは悪いものの、この床は壁のすぐ外側の地面を補強するものであったと考えられる。

この地区の鉄器時代の文化層からは、主に7世紀の土器やそのほかの遺物が検出された。出土土器には一部鉄器時代Ⅱ期の土器が混じっており、さらに下には、鉄器時代Ⅱ期の遺構が存在すると考えられる。特筆すべきは、以下の3点の遺物ですべて鉄器時代の文化層から出土している。1つ目は、Wild Goat Style(野生山羊様式)の破片である(図8)。バトルーンにもアナトリア西岸地域(おそらくイオニアやアイオリア)から東方ギリシア土器(East Greek Pottery)が輸入されていたことを示す証拠である。2つ目は、メソポタミアの神話に登場するフンババを表現したと思われる



図8 東方ギリシア土器「野生山羊様式」(Wild Goat Style)の破片



図9 フンババと考えられるアラバスター製の彫刻

石彫刻である(図9)。アラバスター製であり、壁掛けあるいはペンダントとして使用されたと考えられる。3つ目は、土製の羽口(tuyère)である(図10)。先が曲がった特徴的な形をしている。おそらく金属生産(青銅か?)に使用されたものと思われ、類似するものがレバノン南部のサレプタ(Sarepta)から出土している。ただし、年代は後期青銅器時代Ⅱ期である。

2.3. 西区

最後は、調査区の西部に位置するこの地区である。私たちの調査が実施されるまでは、2017年の調査で出た廃土が積まれていた。廃土を除去し、掘り進めると東部では砂岩の岩盤が一面に現れた。一部に切石を切り出した痕跡がみられたが、おおむね平らな表面をした岩盤であった。この地区の西端には、現代の土留め用の石壁があるが、この壁のすぐ内側、つまり岩盤の西端において4つの石切り場のピットが出土した(図11)。このうち一番北側のものが大きく(7.3×5.1 m、深さ3.95 m)、南側の3つは似たような大きさをしていた。

これらの石切り場ピットからは、時代の異なる堆積



図10 羽口と考えられる土製品



図11 西区の空撮写真。写真の下が地中海側。西端に4つの石切り場ピットが見える。



図12 西区最大の鉄器時代石切り場ピット(北から)。まだ発掘途中の状況。

層が検出された。一番北側のもの(Sector D)(図12)とその南側のピット(Q3: 3.8×2.6 m、深さ2.5~3.0 m)(図13)からは鉄器時代Ⅱ期の遺物が出土した。そのさらに南の2つのピット(Q2: 3.3×2.5 mとQ1: 3.5×2.0 m、深さ1.7 m)からはローマ時代の遺物(テラ・シギラータ土器、機織り用錘、鉄製刀子など)(図14)が発見された。おそらく、それぞれの検出された文化層の時代に利用された石切り場であったと考えられる。

ここで重要なのは、一番大きな北側のピットである。そこからは大量の土器片とともに石材片や祭祀関係の土偶などが出土している。例えば、レヴァント沿岸部



図13 西区2つ目の鉄器時代石切り場ピット(南から)。ノミの痕跡が壁に残る。



図14 西区のローマ時代の石切り場ピットから出土したテラ・シギラタ土器。

で見られる面長な容貌をした男性土偶の頭部が出土している(図15)。頭巾のようなもので頭部が覆われているのが特徴的である。また、丸彫り風に作られたテラコッタ製の女神(?)裸体像(図16)は、ニネヴェのイシュタル神殿から出土した石製の女神(?)裸体像に類似する。メソポタミア文化の影響を受けたものであろうか。レヴァント沿岸部で出土する女性土偶にはあまり見られないふくよかな体格をしている。また、後期幾何学文様期に位置づけられるスキュフォスも出土している(図17)。東方ギリシア土器のカテゴリーに含まれるもので、おそらくアナトリア西岸地域からの輸入品であろう。さらに、遺物の中には、フェニキア文字が刻まれた土器片も複数出土した(図18)。このようにこの鉄器時代の石切り場跡からは多様な遺物が出土し、今後の整理作業によりバトルーン遺跡の交



図15 鉄器時代石切り場ピットから出土したテラコッタ製像の頭部。



図16 鉄器時代石切り場ピットから出土したテラコッタ製裸体像。

流関係の広さがより明らかになると考えられる。

以上の石切り場跡の調査は、バトルーンの沿岸部において切石生産が鉄器時代までさかのぼることを証明した。現在のところいわゆる「フェニキアの壁」の年代を決定するのは困難だが、石切り場に残るノミの痕跡などを今後詳細に研究することで、鉄器時代とそれ以降の時代において石切りの技術に変化があったのかどうかを検討できるかもしれない。

3. 遺跡の今後

今回調査を実施したH調査区についてレバノン考古総局は、出土した建築遺構を野外遺跡公園として保存する計画を立てている。H調査区は、「フェニキアの壁」さらには地中海沿岸に面しており、観光的な魅力も保有する。すでに地主との話し合いは進められて



図17 鉄器時代石切り場ピットから出土した東方ギリシア土器のスキュフォス。



図18 鉄器時代石切り場ピットから出土したフェニキア文字のある土器片

おり、遺跡に陸橋のような施設を構築することで、見学者が出土した遺構を上から眺められることを目指していると聞いている。

レバノンでは、地域開発にともない多くの、特に沿岸部の遺跡が消滅してきたが、このバトルーンに関してはその重要性に鑑み、関係当局も真剣に保護施設の構築を考えているようである。日本側も何かしらの支援ができるのではと考えている。

4. まとめと展望

2018年から開始したバトルーン遺跡の発掘調査も3年目を迎えた。調査の結果、バトルーンの歴史が鉄器時代まで確実にさかのぼることが明らかになっている。D地区の成果に加えてH地区の調査は、鉄器時代の石切り場跡が確認されるとともに、多くの遺物が出土するという大きな成果をあげることができた。また鉄器時代末期から、ペルシア時代、ヘレニズム時代、ローマ・ビザンツ時代をへてオスマン朝時代にいたる変遷も徐々に明らかになっている。バトルーン遺跡は、

沿岸部に広がる砂岩の岩盤を石切り場として利用しながら、その東側に建造物を構築して生活を営んできた。地中海地域との密接な関係を維持しながら、内陸部の文化とも交流関係を持っていたのである。

バトルーン遺跡は、現在の町の下に存在する遺跡である。そのため調査は主に住宅地の敷地を利用して行わなくてはならず、発掘できる面積には大きな制約をうけている。今回は、これまでにない広範囲を調査することができ、バトルーン遺跡の重要性を知らしめる成果が上げられたと思う。今後は、これまでの成果を順次発表するとともに、出土遺構や遺物の分析を進めていきたい。

またレバノン考古総局は、遺跡の保存ならびに公開を目指した施設の構築を考えている。私たち調査団も可能な限りその実現について協力・支援してゆく予定である。それは遺跡調査を担当したもののたちの責務でもあり、このような貢献を通じて、レバノン考古学の発展に寄与できればと思う。

バトルーン遺跡の発掘調査は、レバノン大学、中部大学、および個人出資者からの支援を受けた。調査にあたっては、レバノン文化省考古総局局長 Sarkis el-Khoury 氏、同局北レバノン地区担当官 Samar Karam 女史、および在バトルーンの考古総局職員から多大なる支援をいただいた。フィールド調査では、Muhammad Abdel Sater 氏(レバノン考古総局)、Marc Yared 氏(Wormhole 社)、Paula Abou Harb 女史(Wormhole 社)、Mazen Arzouni 氏(フリーランス考古学者)、Hassane Ghaddar 氏(フリーランス考古学者)らの協力を得た。この場をかりて関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

■参考文献

- ・ Abdul Massih, J. and S. Nishiyama 2021 *Batroun Archaeological Report. 2020 Report of Archaeological Excavation in Batroun* (Field report submitted to Lebanese DGA, Jan. 2021).
- ・ 西山伸一、ジャニン・アブドゥル=マッシーハ 2018 「レヴァント回廊の歴史を掘る—レバノン・ベカー高原南部考古学踏査プロジェクト・第3次(2017年)—」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』44-48頁 日本西アジア考古学会
- ・ 西山伸一、ジャニン・アブドゥル=マッシーハ 2019 「レヴァント回廊の歴史を掘る—第4次(2018年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の試掘調査—」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』114-118頁 日本西アジア考古学会
- ・ 西山伸一、ジャニン・アブドゥル=マッシーハ 2020 「レヴァント回廊の歴史を掘る—第5次(2019年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の試掘調査—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』35-39頁 日本西アジア考古学会